

宮崎公立大学生の今を伝える

MMU SHiP

エムエムユー
シップ

特集 1

学生はなぜ中心市街地活性化ボランティアに魅せられるのか

特集 2

CHALLENGESHIP the UDON!
~うどんに挑戦!~

CONTENTS

留学体験記 视界よっ! —韓国 蔚山大学校

Real Voice

高校生の質問に答えますスペシャル

しっぽり語る —宮崎1年目のホンネ

@MIYAZAKI —MMUスタイル 学生の1日

CIRCLE DE GOSHIP

—顧問と部員との絆がやたらと強い部活動

連続リレーエッセイ いいだしっぺ

—阪本 博志 准教授「夢を見るということ」

...and more!

今回の表紙 「しっぽり語る」座談会に参加した宮崎1年目の方々 (P.11へ)

左から松本 和樹さん(1年 京都府出身)、田村 恵理子助教(国際法ゼミ 大阪府出身)、胡 遠芳さん(1年 中国 安徽省出身)。まずは本誌独自の「MIYAZAKI・MMU 検定試験」を受けていただき、その回答結果を交えながら、「宮崎1年生」の視点で宮崎とMMUについてホンネで語っていただきました。撮影場所は、検定の問題にも登場した阿波岐原森林公園 市民の森の中にある「みそぎ池」。

Miyazaki Municipal
University
Communication Magazine
"MMU SHiP"

vol.02



中心市街地のカフェでドマクエの進捗状況を報告する「学生」と、アドバイスする「街の大人たち」。右から3番目が学生リーダーの前川さん。

「早く早く！」
小学生くらいの男の子が大きな声で叫びながら、バタバタと街路を走っていく。その後ろを、父親が息を切らせてついていく。祖父母と一緒に地図を覗き込み、「次のミッションはどこかな？」と目を輝かせている女の子もいる。

10月21日。この日は宮崎市の中心市街地を舞台に子どもたちがスタンブラリーやミニゲームをクリアするウォークラリー企画「ドマンナカクエストVI」の開催日である。雲ひとつない快晴のなか、約2000人が来場した。友達同士でチームを組んだ小学生や親子連れが、地図を片手に路地裏を駆け回る。

その中で、黒と赤のおそろいのTシャツを着た大学生ボランティアが子どもたちとふれあっている姿が見られる。白雪姫の形を模したボーリングピンめがけてボールを転がす子どもに、「がんばって！」と声をかける。見事すべてのピンを倒した子どもは、思わず顔をほころばせた。

ドマンナカクエスト（以下ドマクエ）の企画や事前準備、当日の運営を担当するのは、宮崎公立大学（以下、MMU）の学生を中心とした学生ボランティアスタッフだ。

ドマクエが最初に開催されたのは09年。当時のMMUの学生が「子どもたちを中心市街地に集めて活気づけたい」という想いで企画したイベントが、現在まで4年間途切れることなく開催され、今もなお数多くの学生がボランティアスタッフとして活動している。その数は多い時で100人を超えるというから驚きだ。

最近の大学生は「他者と関わることが苦手」「個人主義的」「主体性がない」などと、その内向性が指摘されることが多いが、ドマクエに関わるアクティブな学生たちからは真逆の印象を受ける。一体なぜ、これほど多くの学生が、持続的にドマクエに没頭しているのか。その魅力を探るために、ドマクエVIを密着取材した。

「街の大人たち」と「学生」

ドマクエは、宮崎市中心市街地の6商店街と5大型店の地元商業者で組織されたDoまんなかモール委員会が主催している。しかし、ドマクエに関する企画・運営の大部分において、学生ボランティアスタッフに裁量権が与えられている。

学生ボランティアスタッフは、ドマクエの企画段階から準備に携わる「コアメン（コア・メンバーの略）」と、ドマクエ開催当日に運営業務に従事する「当日ボランティア」に二分される。コアメンは2〜3年生約10人で構成され、その中の1人がプロジェクトリーダーを務めることになる。ドマクエVIのプロジェクトリーダーは前川麻理子さん（3年 国際法ゼミ）だ。

前川さんを中心としたコアメンは、ドマクエ開催の半年前の4月から企画に取りかかった。主に大学内でのミーティングを重ね、イベントテーマや予算配分、当日プログラムの企画内容について

特集1 学生はなぜ 中心市街地活性化ボランティアに 魅せられるのか

大学生が「内向的」になったと言われる現代。だが、100人以上の大学生が没頭するボランティアプロジェクトがあるという。

決定していく。

そんな学生スタッフを支えるのが、Doまんなかモール委員会の「街の大人たち」。個人店舗の店主や大型店の社員など、厳しい経済情勢の最中に商業の最前線で戦う地元商業者たちだ。

Doまんなかモール委員会は、毎週土曜日の午前中に、中心市街地のカフェで「朝ミーティング」と呼ばれる打ち合わせを行う。学生はこのミーティングに参加して、ドマクエの企画や事前準備の進捗状況を報告する。

インターンシップ的要素

街の大人たちは、学生たちの意見を尊重しながらも、その仕事内容についてビジネスの視点で厳しくチェックし、アドバイスする。

冒頭の写真は8月上旬の朝ミーティングの様子だ。前川さんからの進捗状況報告に対して「協賛の件、どうなった？」「業務全体の把握はできてる？」「準備物が多いから、一覧表を作って情報共有しようか」と次々に質問や指摘がなされる。「予算書の内容や、協賛先や小学校に配布する文書の形式は、かなり厳しくチェックしてもらっています。その他にも、社会に出てから役立つことをたくさん指導してもらっています」と前川さんは話す。和やかな雰囲気の中で、ミーティングは1時間にも及んだ。

「街の大人たちに教わることも多い」と、これまでドマクエをはじめとする中心市街地活性化ボランティアに関わってきた学生たちは口をそろえる。学生たちにとって、大学内で得た政治や経済の知識をビジネスの現場で体現している商業者のアドバイスは、自分を成長させてくれる格好の教材として、とても魅力的に感じられるようである。社会人準備教育と呼べるインターンシップ的要素が、街の大人たちと学生の関わりの中で発生している。



学内での会議の様子。和やかなムードの中にも緊張感が漂う。



大道具の制作風景。空き店舗を作業スペースとして提供してもらっている。

参加者や街の反応

台風接近による延期を経て、10月21日にドマクエVIは開催された。街の各所に仕掛けられたミッションには子どもたちの順番待ちの列がびびている。メインストリートから路地裏まで約200人の親子連れが歩き回り、大変な賑わいを見せた。

「街中で開催されるイベントに参加する機会はないが、ドマクエのように子どもと親と一緒に遊べるイベントは参加しやすい」「小学校で配られた案内を見て来た。子どもが楽しそう何より」と、参加者からも好評だ。

商店街はどのように感じているのか。四季通りでブティックCONSORTIAを営む栗栖さんは、「大学生がこのような活動をするのは素晴らしいこと。商店街にお客さんが来ることは、売り上げ云々を抜きにしても良いことだと思う」と話す。

また、偶然にもドマクエVI開催日と同じに、路上でのアートパフォーマンスや地元アーティストの作品展示を行う「みやぎぎアートマーケット」が開催されていた。絵具を服や顔に塗り付け大きな紙の上を転がり回るモヒカン男性アーティストのパフォーマンスを、子どもたちがワクワクしながら眺めている。

「街という日常の空間に芸術を配置することで、たくさんの人に親しんでもらいたい

と書いている。そのことが結果的には街に人を呼ぶことにつながるし、志はドマクエを企画している大学生と同じです」と、代表のくさんもドマクエの活動を歓迎する。

冒険心をくすぐる入り組んだ路地、飽きる暇がないほどのたくさんの仕掛け、笑顔で迎えてくれる大学生のお兄さんとお姉さんたち、突如現れる絵具だらけのモヒカンとアート作品——この日の街は、子どもたちの目にさぞかし魅力的に映ったに違いない。

これまで見てきたように、中心市街地活性化ボランティアとは、学生にとっては「社会人としての実践的なスキルやノウハウを身につけられる場」「人間関係や価値観を広げる場」であり、街の大人たちにとっては「地元を革新するフレッシュな活動力」であるという、WIN-WINの構図が存在する。

しかし、前川さんにその魅力を尋ねてみると、「とにかく楽しむから続けてきたし、あまり深くは考えたことないんですけど、ゆるい感じが肌にあったのかな。メンバーになるのも会議に出るのも基本的には自由なので」と、意外な答えが。一方で、「どこになるのかはまだわかりませんが、将来自分が住む街でも傍観者ではなく前向きに行動できる人間でありたいと思います」。ドマクエを通じて成長した前川さんの目は、しっかりと将来を見つめている。

■記事 河野一郎（4年ジャーナリズム論ゼミ）

参加者や街の反応

街に居場所ができる

ドマクエが直前に差し迫った9月23日の午後7時、前川さんたちコアメンは中心市街地の空き店舗の一室に集まった。壁や床がコンクリートむき出しの何もない空間に、ビニールシートを敷いて机代わりの段ボール箱を持ち込み、ドマクエのミッションで使用する大道具を和気あいあいと制作している。

空き店舗を提供してくれているのは、この中心市街地に戦前から店を構える有限会社かい帽子店の三代目社長、甲斐輝一さん。帽子店を営業する自社ビルの1室が現在空き部屋となっているため、学生ボランティアの早朝深夜の活動拠点や物品の保管場所として提供してくれている。

「僕は何もしていないですよ、場所を貸しているだけ。商店街との調整はするけど、基本的に学生の自主性に任せています」と甲斐さんは話す。「あまり堅苦しく考えず、まずは知り合いになることが大切だと思います。そうすれば、すぐに街の中で人間関係が広がって、居場所がたくさんできますから」。

この日ドマクエのOGGとして後輩の応援に駆けつけた今村理香さん（4年 American Studies ゼミ）も、「このボランティアを始めてから、街に出かけると色んな場所地元の方から声をかけられるようになり、お茶を飲ませてくれたりご馳走してくれたり家族が増えたよ」と笑顔で話す。

MMUの学生のうち、半数以上の学生が宮崎県外の出身で、宮崎市内のアパートで1人暮らししながら通学している。学内では同世代のアットホームな人間関係があるものの、アルバイト以外で異なる年齢層の人間と接する機会は少ない。当然、学生の居場所は図書館やラウンジ、学食や部室等大学内に限定されることになる。

そんな中で、ボランティアを通じて街に学生の居場所ができることは、学生の行動



FAAVO 宮崎のウェブサイト。様々な地域活性化プロジェクトを紹介し、資金提供を募るシステム。資金提供はカード決済により行われる。

全国からの資金提供

ドマクエを開催するためには、広報のためのチラシやポスター、装飾品の材料、スタンブラリーの景品、スタッフTシャツ等の費用が約27万円かかる。しかし、Doまんなかモール委員会のドマクエ関連予算は15万円。

そこで、前川さんたちは、ウェブサイトを通じて不特定多数の人たちに資金提供を呼びかける「クラウドファンディング」と呼ばれる方法で、不足する12万円を調達することに。地元応援クラウドファンディングウェブサイトをFAAVO宮崎で呼びかけた結果、県内のみならず全国各地に在住する宮崎ファン15人から12万円の資金提供が得られた。

半径や価値観を大きく広げることにつながる。そして何より、宮崎の長所である「地域コミュニティの温かさ」を、学生は感じることができると。

「ゆくゆくは、宮崎に愛着がわいて宮崎に就職してくれる若者が増えることを願っています」と、Doまんなかモール委員会委員長の福田好哲さんは話す。



ドマクエ当日の中心市街地。子どもたちが街に親しみを持ち、活気づけてくれることが期待される。



子どもたちは、各所に設けられたポイントで、スタンプを集めながらミッションをクリアしていく。



同日開催されていた芸術で街を活性化させようというイベント「みやぎぎアートマーケット」。アーティストと子どもたちがふれあう風景も多く見られた。



地図を片手に商店街をかけまわる子どもたち。



平日午後の中心市街地。20年前と比べると、人通りが減った印象を受ける。

Theme1 「文学を仕事にしないでよかった」

もともと文学好きで、学生の頃も英文学を専攻していたんだ。いわゆる花形と呼ばれる19世紀のイギリス文学、ヴィクトリア朝の文学より、現代文学特にジョイスに興味があったね。英文学以外にもカミュの『異邦人』やカフカといった、人間の不条理を描いた作品に惹かれていたね。

僕の行動原理の1つは、「それが面白いかどうか」。英文学には、当然ストーリーがあって、人間が描かれている。その人が、その時、その状況で、どういった行動をとったか。それを読み解いていくのが楽しいんだ。

今思えば、英文学を仕事にしないで良かったよ。仕事にしたらと、成果を出さないといけない。成果のことを考えながら英文学を読んでも、僕は面白くないからね(笑)。

Theme2 「ダ・ヴィンチになれ！」

周りのことが気にならなくなるくらい何かに集中できるのは、学生の特権。それが勉強でも、遊びでもね。1つのことを一生懸命やると「突き抜ける」。その道の第1人者は、自らの専門分野だけでなく、その周辺分野についても見地を持っていて、言語化できるんだ。

例えば、英文学の中に植物が出てくる。英文学に強い興味があると、その植物も気になってくるんだ。どの季節に、どういった場所に生息しているか、とかね。こんな形で、英文学を学んでいたら、植物学にも興味は沸く。1つの分野にも色々な要素が含まれているよね。これって、「あちこちに芽が出ている」ってことじゃないかな。芸術作品にしたらって、1つの作品に多くの要素が詰まっていたり、どれを欠いても、その「花」は咲くことはできない。これってリベラル・アーツにも通じるんだ。リベラル・アーツってつまり、「ダ・ヴィンチになれ！」ってことだよ。

Theme3 「理解できなかった『発音は文化だ!』」

大学生の時は、何になるかは決まっていなかったけど、「何か職に就くからにはプロにならなければ」と思っていたね。

高校教員時代、「何のために教員になったのか」という疑問が膨らんでいた時、中津燎子先生(※)という方に会ったんだ。最初は、中津先生の「発音は文化だ!」という主張が理解できなくてね。でも、何度もお会いする中で、12年間の高校教員時代で培った自分なりの英語教育論がいい意味でぶち壊された。その縁で、MMU開学にあたって、英語の訓練をカリキュラムに組み込みたいので、来てほしいという話をもらったんだよ。住み慣れた広島を離れ、新しいことにチャレンジするのは、1つの冒険だと思って、引き受けたんだ。

※中津燎子先生… 評論家、英語教育者。著書『なんで英語やるの?』は、大宅壮一ノンフィクション賞受賞

KYO-SHIP

MMU教員の頭の中

MMUの教員が、講義では垣間見られない「頭の中」を語ります



Theme4 「スピーチ術、伝授します」

僕は「スピーチ」(英語科音声指導法・英語科スピーチ指導法)という科目を教えているけど、この機会に、スピーチのちょっとしたコツをみなさんにお伝えしますね。

スピーチって、どうしても話し手と聞き手の間に、垣根ができてしまう。その垣根を取り除くには、笑いが重要なんです。笑いにも色々あって、一番取っつきやすいのは、自分の失敗談かな。聞き手に親近感と興味を持たせることで、自分の思いや考えも、伝えやすくなるんだよね。

あと、交渉のテクニックについてもアドバイスを。相手の意見にただ真面目に返しても効果は薄いから、アイロニー(皮肉)やブラックユーモアを交えるなど、ちょっとひねって相手に返して、時には相手を怒らせる(感情を露わにさせる)手段が、実は非常に有効なんだよ。

Theme5 「当面の目標は、人材を育てること」

MMUの学生ってすごく素直で、素朴だね。入学した当初は、みんなが必ずしも優秀とはいえないけど、スポンジのような吸収力で、どんどん成長していく。都会の学生と比べて、伸びしろがあるよね。様々な場面で自らを表現しているのは素直にすごいと思うし、その大学の一員でいられることを幸せに感じる。

昔と今では、学生の様子は変わったよね。時代の流れだと思う。自分たちの世代は、何かに目に見えない拘束を感じていた。それは自分というものが見えないもどかしさ(自我喪失感)だったのかもしれないね。その見えない拘束力は、今も昔も変わらない。自己の落ち着かなさが「安定志向」に繋がっているのかな。そして9.11以降、世界全体が委縮しているように感じる。3.11でそれが加速し、それが偏った「安定志向」をより強くしてしまっているんじゃないかな。それが、昔と今の違いかな。

自分たちだけが良いていう考え、そして今のこの世の中を、そのまま次の世代には渡したくない。ガンジーの言葉「この世界最大の悲劇は 悪しき人の暴言や暴力ではなく 善意の人の沈黙と無関心だ。」を心に刻み込んでこの世の中を変えていくことのできる人材を、これから育てていくのが、僕の当面の目標です。



音楽についても語りたかったなあ

■記事 志垣 賢次(4年 広告コミュニケーションゼミ)



interview

桑田 ナナ子さん

4年 大衆文化・出版文化論ゼミ

韓国の蔚山大学校に公費留学をした桑田ナナ子さんに、その貴重な体験談を語っていただきました



奉元寺(ポンウォンサ)



蔚山大学校 国際交流館



一山(イルサン)の海岸

■記事 山下 由香(4年 ジャーナリズム論ゼミ)、大久保 弘樹(2年 日本文学ゼミ)

留|学|体|験|談

世界へ漕ぎだせ!

視界

よしっ!

vol.02 ウルサン
韓国/蔚山大学校
한국 / 울산대학교

記者 公費留学に至るまでの経緯を教えてください

桑田 最初は1年次に韓国語の授業を受講していたのですが、実は当初はあまり関心が高かったわけではなく、1年で学習を辞めようとも思っていました。しかし、2年次に「異文化実習」(短期派遣研修)で韓国に約1カ月間滞在したことがきっかけで韓国が大好きになり、留学をしたいと思うようになりました。公費留学生選抜試験を受けたのは3年次前期で、公費留学に行ったのは翌年の3月からです。

記者 異文化実習に参加した動機は?

桑田 実際、大学間の協定のおかげで異文化実習の参加費用がとても安かったことが大きな要因でした。経験の幅を広げられるかなと思い、友人と参加を決めました。

記者 公費留学生選抜試験に合格するためにしたことは何ですか?

桑田 異文化実習を終えてから、選抜試験に必要な検定試験の勉強を徹底的にやりました。自習用のテキストに取り組んだり、先生に作文を定期的に添削していただいたりしました。会話の勉強は異文化実習の時に知り合った韓国人の友達とメールをしたり、MMUに来ていた韓国人留学生や留学を経験した先輩に教わりました。

記者 留学での経験を教えてください

桑田 韓国の言葉や文化を実際に経験し学ぶことができたのはもちろん、蔚山大には、日本人やその他の国の留学生も多く在籍しているので、日本では出会えないような人々とたくさん出会えたのがとても良い経験になりました。他には、留学中に積極的に韓国の様々な土地を訪れることができたのが良かったです。普段の生活では周囲の友達や先生がとても良くしてくださったので、特にホームシックを感じることもありませんでした。

記者 蔚山大での授業はどのようなものでしたか?

桑田 前期は外国人留学生のための語学授

業を中心に受講し、後期からは蔚山大の学生が受講する様々な授業を履修しました。国文科に所属していたのですが、例えば韓国の歴史、文化などを学ぶ授業があり、もちろん全て韓国語です。蔚山大はとても大きな大学なので、授業の種類も多く、どの授業を履修するのか選ぶのが大変でした。

記者 MMUでの専門演習の内容と今回の留学で何か結びつけたことはありますか?

桑田 私は大衆文化・出版文化論ゼミに所属していますが、卒業論文は留学で学んだことや韓国のことを交えて書きたいと考えています。

記者 韓国で驚いたことは何ですか?

桑田 料理がとても辛いものばかりだったことです。辛い物好きの私でも最初は食べられませんでした。留学が終わる頃には食べられるようになりました。3食ほぼすべてにキムチがあります。

記者 将来の展望を教えてください

桑田 卒業後は韓国で就職したいと考えています。特に私が留学した蔚山広域市はとても美しい町で思い入れがあるので、是非そこで働きたいと考えています。韓国に全く興味がなかった私がこのように韓国で働きたいと考えるようになったのも、2年次の「異文化実習」のおかげです。

記者 留学で成長できた点は?

桑田 語学はもちろん、自分の可能性を新たに発見することができました。様々な国の留学生や人々に出会い、価値観に触れることで「自分にはこんなことができるんだ」と再認識でき、物事の発想やインスピレーションも浮かびやすくなりました。

記者 在学生にメッセージをお願いします。

桑田 留学というと、少し堅苦しく難しいイメージですが、MMUの留学制度はとても充実しています。みなさんも是非MMUから留学を目指してみてください。

うどんに挑戦!

5つの視点をもつMMUの学生が うどんを軸に語っちゃいます

宮崎には「うどん文化」が根付いている。早朝は、一日を元気づける朝うどん、夜は繁華街の中、優しい光で酔客を誘う締めうどん、私たちが魅了して止まない。宮崎人の心とお腹をがっちり掴むうどんについて、日頃からお世話になっている学生が、あえて語ることに挑戦(チャレンジ)。5つの専門課程それぞれに所属する学生が語るうどんはどのような味付けに仕上がっているか。ゆっくりご賞味あれ。



日本文学の視点

4年 志摩 啓一朗さん

「鰻(うどん)」が人だったら、「さん」付けて呼びたい。何故か。たとえば、次は夏目漱石の小説『吾輩は猫である』の一節。

「僕は鰻(うどん)が好きだ」鰻は馬子(まご)が食うもんだ。蕎麦の味を解しない人ほど気の毒な事はない」と云いながら衫着をむざと突き込んで出来るだけ多くの分量を二寸ばかりの高さにしゃく上げた。



国際法の視点



4年 中野 愛梨さん

日本人の国民食といっても過言ではない「うどん」。その原料は小麦で、ほとんどを輸入でまわっている。全国的にうどんの消費が多い日本で、国産小麦を使用して作られたうどんはほとんど存在しない。最大の小麦輸入相手国はアメリカで、次いでカナダ、オーストラリアが挙げられる。なにも、日本だけが小麦の需要が多いわけではない。小麦は世界三大穀物のうちの1つであり、世界中で欠かせない存在となっている。

その小麦の過剰在庫に悩まされている国がある。世界第2位の人口を誇るインドだ。同時にインドは、食糧が不足しているわけではないにもかかわらず、多くの子供たちが飢え、栄養不足に晒されている。インドでは中央政府機関が、政府の定めた最低価格で穀物を農家から買い上げ、国民に安価で提供する方法をとってきた。しかし、人口増加とそれに伴う食糧需要の増加に、このような公的配分システムはうまく対応できなくなってきた。「人々が飢餓状態にあるのは食糧不足からではない。政府に助ける気がないからだ」とある農業政策アナリストは言う。

現在提案されている食糧安全保障案は、食糧供給システムの改善を目標としているが、対象とする貧困者の特定方法に問題がある。政府によりこの法案が改良され、国民全体に十分な食糧が行き渡り、人々の生活が改善されることを期待したい。

馬子とは馬を引いて歩く人のこと、ここでは庶民といったところ。漱石は江戸牛込馬場下横町生まれの江戸っ子である。そば文化圏の江戸東京で、鰻は、あまり褒められてはならないようだが、これは、どんな役柄にも柔軟に対応する、鰻の懐の深さや、優しさがにじみ出るようなエピソードである。鰻は、庶民の味方なのだ。

「鰻さん」はとても優しい、酔った次の日だって、風邪を引いた夜にだって、日々忙しき現代人である僕らの舌に、胃に、心に優しい。呼べばすぐ来る友達のごとく、白馬に乗った王子様のごとく、嫌な顔一つせずに力になってくれる。

「鰻さん」は超がつくほどの有名な元は西日本の食とはいえ、日本中どこに行っても、「鰻さん」を知らない人はいない、おなが減って力が出ない。そんな時には、鰻さんの名を叫べばよい。サインは無理でも、最寄りの「鰻さん」屋さんの場所を教えてください。

かとも名高い鰻。ただし、一口に鰻といっても、讃岐、水沢など多くの種類がある。また、家庭や地域、作り手などによって異なる味や特徴を持つ名もなきうどんも数多(あまた)存在する。種の硬さや、汁の色が違っても、それは鰻。どれが本物が、答えを出せようか、いや出せない。「文学もまた同じ、答えは一つではない」。文学とは実に鰻的なものである。

宮崎にもまた、独自の鰻がある。漱石の弟子、芥川龍之介の代表作の一つ『蜘蛛の糸』。蜘蛛の糸は切れやすい。宮崎の鰻は、この蜘蛛の糸によく似ているといっても過言だ。大いに過言である。だが、文学の答えは一つではないのだから、この文学的な連想や比喩を、誰にだって否定できない。

オーラルコミュニケーションの視点



4年 坂本 裕介さん

「オーラルコミュニケーション」口頭での意思伝達は、人間が生きていくために欠かせないアクションであり、人間関係構築にとって重要である。そして、表面的な言葉のやりとりでなく、万人が潜在的にも「欲」を満たすツールにもなりえる。私は、人と人のオーラルコミュニケーションの中で生み出される欲求、「対人欲求」を研究テーマとして取り上げた。今回は、この観点から、コミュニケーション媒介としてのうどんの分析を試みる。

まず、「対人欲求」とは、Sourin氏が提唱する「個人の集団行動を決定づける欲求」である。今回は、その一つ「包容(Inclusion)」という対人欲求に注目する。包容は、会社、家族、国家など、グループへ帰属したいという欲求である。Sourin氏は、集団に属する人間がそれぞれの欲求を満たしていくことで、集団の形成、発達を可能にすると言及している。

うどんはこの「包容」を満たす可能性を十分に含有していると考えられる。例えば、宮崎では一般的な「締めうどん」。飲んだ後、胃にやさしいうどんが食べたくなる。締めうどんの普及は、ただ締め合うというだけでなく、人々が「飲んだ後どうしが食べたくなる」という感情や欲求を共有しやすいからではないだろうか。人間関係を構築していく手前、深い関係でない人でも気軽に「締めうどん」という共通の欲求をシェアすることで、帰属意識、対人関係の中で生みだされる「包容」欲を満たすことができる。締めだけでなく、朝うどんやうどん鍋など、スタイルに富んでおり、コミュニケーションツールとしても魅力的だ。このように人間関係構築の潤滑油としての働きをするうどんであるが、今後、どのように対人欲求の媒介としての存在意義を発揮していくのか、注目していきたい。

情報社会学の視点



4年 土井 美樹さん

情報社会学とは端的に説明すると、情報社会と言われる現代、人々のライフスタイル、価値観はどのように変化している(またはしていく)のかを学ぶ学問である。さて、今回はその情報社会学の観点から、私的な思い出も絡めつつ、うどんについて考察する。

うどんと言えば、麺にコシのある香川県の讃岐うどんを連想する人が多いだろう。私も「麺と言えばコシ!」と思っていたが、大学進学を機に宮崎に来た私にとって「宮崎うどん」は驚きだった。麺が柔らかいのだ。うどん屋さんに行ってもそばを頼んでいた私が、宮崎の柔らかい麺の優しい味に魅了され、今では週に1回はうどんを食べるほどになった。

さて、1人のうどん嫌いを改心させた(大袈裟?)「宮崎うどん」が、全国的には認知されていないのはなぜだろうか。新井克弥氏のブログ「勝手にメディア社会学」の記事「記号化されないものは認知されない」を参考に考察してみよう。

香川県は自ら「うどん県」を語るほど、うどん1人当たりの消費量はほぼ抜けている。その要因は、特産品の煮干しをはじめ、うどんの材料が手軽に入手できることなど、いくつかある。しかし、何よりも全国的に有名になった理由は、香川県民たちが、自らのうどんの特徴、誇るべき美味しさに気づき、それを「讃岐うどん」という新しいブランドとして明確に記号化したことなのだ。

宮崎の人は、宴会の後の「締め一杯」にうどんを選ぶ人も少なくない。そんな県民の独特なライフスタイルの特徴の一つともなっている「宮崎うどん」は、ファンの私から言わせてもらえば地域ブランドと成り得る魅力を持っているし、全国の「うどん」の価値観に新たな一面を見せてくれると考える。

スポーツ・健康科学の視点



4年 榎本 恵里奈さん

最近、ダイエットブームなどにより健康志向の人が多いですね。痩せたいけど、食べたい!そんなあなた、うどんによる健康的なダイエットに興味ありませんか?

うどんは他の食物に比べて消化吸収のスピードが非常に速く、即効的にエネルギー源として使われるため、試験勉強中の夜食などに最適です。また、消化の良さから、スポーツとの相性も抜群です。うどんに多く含まれるグルタミンや小麦グルテンは、脂肪を体外に排出させる酵素を活性化させ、血液中の中性脂肪・コレステロールを減少させる効果があります。肥満改善が期待できる。ダイエットにピッタリの食材です。さらに、効果的に栄養を取りたい方はトッピングにも注目してください。たとえば「卵」、ビタミンB1が多く含まれており、糖質の代謝を手伝ってくれます。次に「わかめ」、低カロリーで食物繊維を多く含む、満腹感を増し、便通を良くし、ダイエット中に不足しがちなミネラルを補給してくれます。「ねぎ」や「トウガラシ」は、脂肪燃焼を促進し、身体全体の代謝を活性化させます。

また、宮崎には麺に魚がすり込まれている珍しい「魚(ぎょ)うどん」が日南市の当地グルメとして人気急上昇中です。魚うどんはトウオウを麺に練りこんでおり、少量で満腹感を得ることができ、高タンパク質・低カロリーでダイエットにいいのではないのでしょうか。みなさんも様々なトッピングを使って、自分だけのオリジナルうどんで、健康的にダイエットしてみたいはいかがでしょうか。

■記事: 坂上卓月 (4年 国際関係論ゼミ)

宮崎1年生には難しい!?

MIYAZAKI・MMU検定試験

- Q1. 履修登録から日常の悩みまで何でも来い! 悩める1年生たちの相談に乗ってくれる、心強い先輩たちの組織名称は?
- Q2. 毎年11月に開催されるMMUの学園祭の名前は?
- Q3. 古事記に登場する舞台が多く点在する宮崎県。メモリアルイヤーの今年は、古事記編纂〇年?
- Q4. MMUのホームページで見ることのできる、職員が毎週更新している大人気のブログの名称は?
- Q5. 数多くのスポーツのキャンプ地となっている宮崎県。中でもWBC日本代表チームのキャンプでも使用された球場の名前は?
- Q6. 古事記や日本書紀でお馴染みのイザナギが黄泉の国の穢れを祓った「みそぎ池」が近くにある神社といえば? (答えはどこかのページにあります)

検定試験に挑戦した宮崎1年生の3人



胡 遠芳さん 1年

■検定試験の主な回答
Q2の回答:「りょうらんさい」(正解!)
■本人コメント
他は全然わからなかったです...



松本 和樹さん 1年

■検定試験の主な回答
Q4の回答:「金の週刊」
■本人コメント
ゴールデンウィークになっちゃった... (照)



田村 恵理子 助教
国際法ゼミ

■検定試験の主な回答
Q5の回答:「喉まででかかっているのに...」
■本人コメント
6問中5問正解! やるやんワタシ (笑)



〜宮崎1年目のホンネ

今回は、今年宮崎にやって来た「宮崎1年生」のみなさんに、本誌独自の「MIYAZAKI・MMU検定試験」を解いてもらい、座談会に挑んでもらった。これまで抱いていた宮崎・MMUイメージや、実際に大学生活を送って感じたことをしつぽり語ってもらったことにより、読者に「リアルな宮崎・MMU」を知っていただく。

座談会

〜検定挑戦後、みそぎ池でしつぽり語る



■記者 山本麻育子(2年 社会学ゼミ)、早川康輝(1年)

田 やつぱり関西人やね(笑)。
松 僕は普通に喋りますけど、その沈黙に耐えられなくて(笑)。
田 なるほどね。でも、胡さんの日本語はとても上手やし、気にせずどんどん話してええと思うよ。恥ずかしいのかな?
松 僕は普通に喋りますけど、その沈黙に耐えられなくて(笑)。
田 やつぱり関西人やね(笑)。

田 わたしは道を歩いている人が少ないのに驚いたね。それに電車が全然無いよ。しかも中に人がほとんど乗ってなくて、時には誰も乗ってない車両とかあって「エッ」ってなったわ。
松 それにコンビニの駐車場がやたら広いんですよね。後はテレビが2チャンネルしかない...
一同 ああ(遠い目)。
早 ところで、MMUに來られて約半年ほど経ちますが、MMUや学生の印象はどうですか?
松 学生以外の地域の色んな人たちが大学構内を散策しているのを見ますよ。
田 ほのほのしてるやんね。あと、学生は真面目で素直な子が多いかな。打ったらその分返ってくる、みたいな。だから、すぐやりがいがあるね。でも、もうちょっとぶつかってきてもいいかな...
早 そうですね。真面目なのはええことなやけど、あとは...もっと本を読んでもほしいよね!
胡 えっと...みんなちょっとおとなしすぎる気がします。ゼミの時とか、沈黙が多いかな、と。わたしは話するのが大好きですが、以前、福岡の日本語学校にいたときは、周りの人はみんな、よく発言する人はばかりで私も発言しやすかったです。でも、今はあまり話すことみんなの視線が集中する気がして、そんなにたくさん話さなくなりました。

早川(以下、早) インタビューアを務めます学生記者の早川です。早速ですが、今回の検定はこのような結果になりました。
田村(以下、田) あーわたし結構当たってる(笑)。
胡 わたしはほとんど分からなかったです。むずかしいですね。
松本(以下、松) ぼくも...。タスケンジャーは分かっていたんですけど。
早 ということは、松本君はタスケンジャーを利用されたことが?
松 はい。宮崎について本当に何も知らなかったの。行ったら「君、一番乗りだよ!」って言われたのを覚えてますね。
田 へえ。やつぱり1年生にとってはありがたい存在なんやね。おつ、しかも2人、凌雲寺書けるやん。さすがやね。松本君とか、漢字で書けるやん、「凌」の字(笑)。
早 ちなみに凌雲寺ではみなさん何かされるんですか?
松 うん。僕は、ダンスですかね。
田 胡さんは? 餃子とか、中華の屋台を出したりはせえへんの?
胡 炒飯は簡単ですけど、餃子はちょっと苦手ですね。包むのが難しいです。
早 では、宮崎に住んでみて驚いたことや印象は何かありましたか?
胡 田舎だなと思いました。でも、自然が多くて、住みやすいところですよ。
松 僕は、宮崎ってもっと田舎だと思ってたんですけど、意外に市内は都会ですよ。初めて来たときは、色んな店が近くにあつてすごい...。舞い上がりました(笑)。

MMU MEMBERSHIP

REAL VOICE

高校生の質問に答えますスペシャル

平成24年6月16日に宮崎県立宮崎北高等学校で開催された「出前講座」の現場に潜入。そこで高校生のみなさんからゲットした素朴な質問に、MMUの学生・教員・職員がリアルに答えちゃいます!



出前講座講師
渡邊 英理 准教授
日本文学ゼミ

Q1 MMUの学生は、みんな英語が得意な人ばかりなのですか?

本学には普通科系・農業・商業系など、様々な分野から生徒が入学しており、入学時点での英語の能力はそれぞれです。しかし、1年次の必修科目で英語を重点的に学び、全ての学生が高い英語力を身につけます。そして、本学はリベラルアーツなので、2年次からも引き続き英語の能力を高い水準に上げることも可能ですし、私のように情報科目を専門として学び、英語以外の科目を同時に学ぶこともできます。



回答者
西森 眞実さん
4年
ネットワークゼミ

Q2 大学生活と高校生活で大きく違うところはなんですか?

高校生の頃は、時間割によって時間が決められているので、それをこなすだけでしたが、空きコマがあることで、その時間をいかに活用するかを自分で考えなくてはならなくなりました。おかげで、計画を立てて行動し、空きコマの活用方法を考えるようになりました。あとは、講義を自分の好きなように選択できるので、シラバス(授業計画書)を見たり、将来を見据えて選択したりする事は、大学ならではです。



回答者
岐部 由紀枝さん
1年

Q3 外国の方とコミュニケーションを取ることは大変ですか?

大変です(笑)。中でも言葉、言語が一番大変で、自分が言いたいことを思ったように伝えられているか不安になります。言葉を補うために、アイコンタクトやジェスチャーを使って表現しています。ゼミのニール先生は、日本人とは違ったコミュニケーションの取り方をされますが、私の言いたいことをくみ取ってくれるのでとても話しやすく、接しているうちに慣れ、今ではかなり、コミュニケーションに抵抗を感じなくなりましたね。



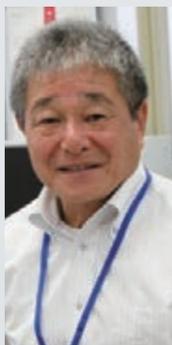
回答者
渡邊 玲子さん
4年
American Studiesゼミ

Q4 学生が講義に興味を持つてくれるよう工夫していることは?

「受講する授業の中で何を学びたいか、興味があるのは何か」など事前に聞くことや、「参加したエクササイズの中でどれに興味を持ったか、もしくはやりにくかったものはあるか」などの質問に率直に意見をもらい、次年度に生かしています。また、ゼミ生が助手として授業に参加してもらったり、学生が私に直接言いにくい事で助手に言ってもらえるので、そこから意見を吸い上げることで次の授業に生かしています。



回答者
戸高 裕一 教授
音楽学ゼミ



回答者
黒木 基
就職支援室長

Q5 就職活動に直接役立つ授業はありますか?

大学の授業全てが役に立つと思います。大学教育は全てキャリア教育になっているからです。各人がそれぞれの将来設計によってどのような専門分野を専攻し、講義を受講していくのか考えていくことが大切です。その中でも私が担当している講義「キャリア設計」は今後の人生でどのような生き方をしていきたいかを考える「将来設計」を行うための授業です。これは、自分の将来設計に一本の筋を通すような講義であると考えています。



回答者
川瀬 隆千 教授
社会心理学ゼミ



MMUスタイル

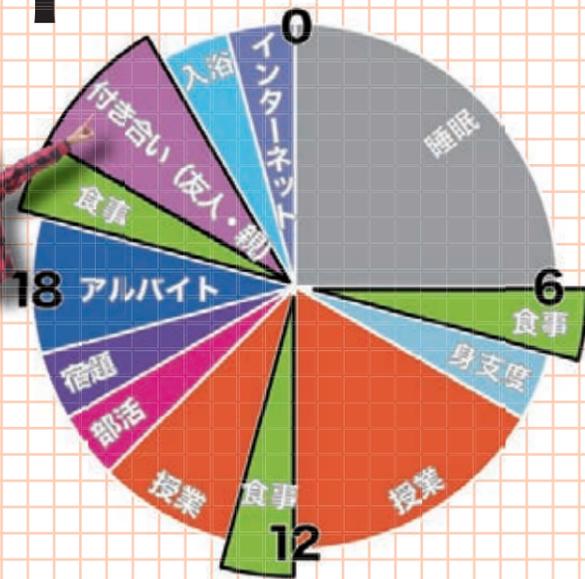
- 学生の日 -

宮崎市内に位置する、MMU。全学生数 924 名という小規模な大学だが、学内は多くの学生によっていつも賑わっている。このエネルギッシュな学生たちがどのような一日を過ごしているのか。広告コミュニケーションゼミ 3 年が調査に乗り出した。その調査結果を、ゼミ長の久保田優介が教えてくれるぞ！

配布日 2012年6月1日 / 調査対象日 5月27日、31日、6月8日、11日 /
回収日：6月2日、12日 / 調査対象者：MMUの学生 全学生 /
調査票配布数：450枚 回収枚数：258枚 有効調査相手数：256名
調査方法：プリコード方式



1年生 孤独への恐怖！？ 複数での活動



1年生のグラフを見ると、20～23 時の間に友人や親との付き合いが活発であることが分かる。
親元を離れての生活に慣れていない学生が、友人と一緒に行動したり、親と連絡を取ったりしているのではないだろうか。
また、食事もしっかり三食摂っていることから、規則正しい生活を送っているようだ。



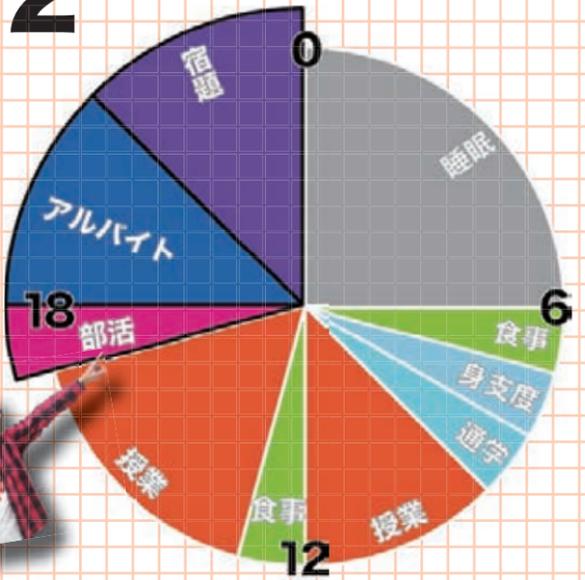
3年生 学内外問わず中心的存在！ バイト、部活にて実力を発揮



3年生は、1、2年生より授業が減る。授業が減った分、バイトや部活に時間を割き、後輩を引っ張る存在になっているのではないだろうか。
バイトや部活以外にも、友人との付き合いをしている割合が高い。
授業がないからといって無駄な時間を過ごすのではなく、各々が活躍の場所を見出して活動している。2年生も充実した放課後を過ごしていたが、3年生もそれに負けない日々を過ごしているようだ。



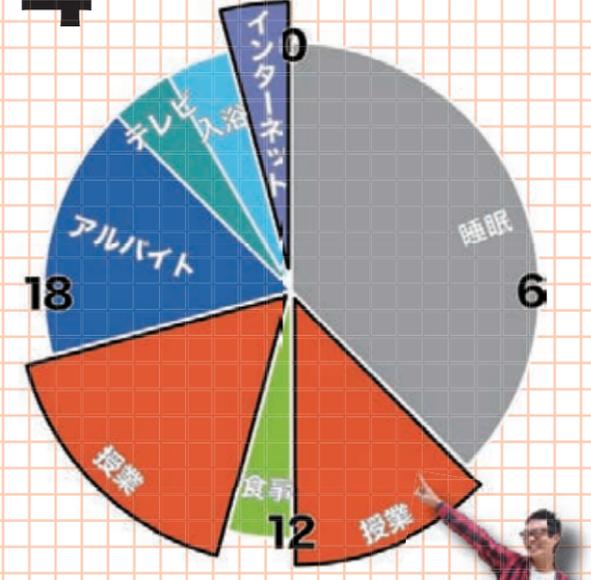
2年生 隙のない計画！ 多忙な日々



2年生は、放課後の時間の使い方に特徴がある。
1年生とほぼ同じ授業時間であるにもかかわらず、17時からの時間の使い方は、部活、買い物、バイト、宿題といった活動を行っている。特に宿題の割合が高いことから、大学生活に慣れ、将来を見据えた資格取得に向けての勉強などに取り組んでいる人が多いのではないだろうか。大学内外問わず、充実した時間の使い方をしているようだ。



4年生 卒業の準備！ タイムリミット、迫る…



4年生は、インターネットの使用率が高いことが分かる。卒論のために使用したり、就活に関する情報を収集したりしているようだ。卒論と就活を両立しながら、卒業に向けて着々と準備していることが分かる。
また、学校にいる時間が長いということも分かる。4年生になっても、大学で活動する学生が多いこともMMUの特徴ではないだろうか。



ニュースの内容は、MMUウェブサイトでもご覧頂けます。



震災から1年以上が経過した現在、被災地から遠く離れた宮崎に住む私たちの記憶から震災の記憶が薄れつつある中、震災がもたらした「現実」を深く知ることで、宮崎人として相互扶助のあるべき姿を考えたい。本シンポジウムはそのような思いで企画されました。震災後の福島地域住民にカメラを向けたドキュメンタリー映画「普通の生活」の上映等、様々な企画が行われました。

- ## Index H24.2 - H24.9
- 2 February 8日 宮崎西中学校にて、教員を目指す学生が英語学習アシスタント活動(3月2日) 宮崎の文化や歴史、名物をつづった「ひむかかるた」競技大会が開催
 - 3 March 14日 大宮中学校で、「別室登校生徒の支援」を行ったMMUの学生に感謝状が授与
 - 4 April 23日 新入生歓迎会が開催
 - 5 May 11日 学生9名に『宮崎市明るい選挙推進協議会常任委員』を委嘱
26日 6名の教員による公開研究発表会を開催
 - 6 June 1日 辻教授が総務省九州総合通信局より表彰
2日 日本マス・コミュニケーション学会開催(3日)
 - 7 July 9日 外国語教育メディア学会開催
5日 韓国・蔚山大学校からの研修生15名と地域住民約70名が餅つき体験など国際交流
9日 「第1回芸術祭」を開催(10日)
 - 8 August 10日 MMUフチ★キャンパスガイド開催
2日 学生から大学への要望が提出されました。
 - 9 September 7日 九州体育・スポーツ学会開催(9日)

7/28 宮崎公立大学シンポジウム「震災のリアル」



震災から1年以上が経過した現在、被災地から遠く離れた宮崎に住む私たちの記憶から震災の記憶が薄れつつある中、震災がもたらした「現実」を深く知ることで、宮崎人として相互扶助のあるべき姿を考えたい。本シンポジウムはそのような思いで企画されました。震災後の福島地域住民にカメラを向けたドキュメンタリー映画「普通の生活」の上映等、様々な企画が行われました。

Pickup News

6/12 学生によるゼミ説明会を開催

2年生が専門演習(ゼミ)に所属するにあたり、ゼミを選ぶ上での恒例行事となっている「学生によるゼミ説明会」参加者にインタビューしたところ、「元々入りたいゼミがありましたが、色々なゼミの話を聞くうちに、それぞれが魅力的な研究・取り組みを知ることができました。選択肢が増えることになりましたが、今日の話を参考に、じっくり考えながら自分の進む道を考えていきたいと思います」と答えてくれました。

CIRCLE DE GOSHIP

今回の噂 顧問と部員との絆が、やたらと強い部活動があるらしい

gos:hip=ゴシップ=噂。MMUの部活・サークルに関する噂の真実を調査。

MMUの課外活動団体(部・サークル)は、必ず教員が顧問に就く。ただ学生活動が活発なMMUには、現在、50を超える課外活動団体が設立されているため、教員が顧問を掛け持ちしているのが実状だ。そのため、顧問が高校までの部活動のように積極的な関わりを持たず、学生が自主的に活動している団体も少なくない。しかし、この2つの関係性がとてつもない、「熱い」部活動があるという情報を入手した我々は、早速調査を開始した。

調査 ~直撃インタビュー



硬式野球部 主将 松木 良晃さん
2年 スポーツ・健康科学ゼミ

記者(以下、記) 部員は何名いるんですか? 松 はい。本当にそうだと思います。試合で松木(以下、松)15名です。負けた時や、負けそうな展開の試合が一番悔しがっているのは先生ですから(笑)。

記 硬式野球部の試合では、辻教授が監督業をされるということですか?

松 はい。試合では僕らと同じユニフォームを着てサインを送ったり作戦を考えたりしてもらってます。

記 MMUの部活では珍しい光景ですよ。試合中の先生との関わりで印象的だった出来事がありますか?

松 僕がチャンスの場面でバントを失敗したことがあるのですが、その時にベンチで先生にすごく怒られました(笑)。でも、このことがあって先生は本当に僕たちのことを思ってくれているのだと感じました。

記 顧問と部員を超えて、試合では本当に監督と選手なんですね。



辻教授(背番号30)のもとに集まる部員 ▲辻教授の監督姿

調査結果

辻教授と野球部との間には、単なる顧問と部員の間を超えた、ある意味「師弟」や「親子」のような関係性を感じた。この信頼関係が、野球部の活躍の原動力となっているのであろう。MMU硬式野球部の更なる活躍に、注目していただきたい。

■記事 志垣 賢次(4年 広告コミュニケーションゼミ)

編集者紹介

なんとか終わりましたー! Doまんなかの方々、小林さんをはじめとする職員の方々、ありがとうございました! 読者の立場に立って、構成を考えるのは難しかったです。しっかりお伝えできれば幸いです!

河野 一郎(4年 ジャーナリズム論ゼミ)
坂上 卓月(4年 国際関係論ゼミ)

編集後記

今年は、4年に一度の祭典、オリンピックイヤーでしたね。中継が深夜にも関わらず、テレビの前で選手たちの活躍に心が躍り、勇気や感動をもらいました。選手全員ではないと思いますが、4年後のオリンピックを目指して既に準備がすすんでいるのではないのでしょうか。継続は力なりですね。そんな季節を横目に見ながら編集作業を進めた本号も、前回の創刊号に引き続き学生と職員の間で共同作業により作り上げられました。

今号は前号以上に、大学の内外へ取材を深めました。学外では、高校へ訪問しMMUに対する質問を聞いた(Reader Voice)、卒業生の先輩後輩による座談会が実現したり(未来のCompass)しました。また、表紙のみそぎ池やうどん特集の写真は、宮崎県民の方なら見覚えのある読者もいたことでしょうか。

また、学内においても、前号であまり取り上げられなかった教員の紹介(KYOSHIP)をはじめ、大好評いただいた創刊号を超えようと、さらなる充実を目指し企画・取材を行いました。これからもフットワーク軽く、学内に目を光らせ、そして時には大学を飛び出し、学生を中心とした色々な話題をキャッチしていきたいと思います。今回取材にご協力頂いた皆様、誠にありがとうございました。

まだまだ生きたての「MMUSHIP」ですが、発行を重ねながら成長し、これからも「宮崎公立大学の今」を伝えていきたいと思えます。

■担当 福元康敏(企画総務課 企画係)

お知らせ

●第2号を迎えた宮崎公立大学広報誌「MMUSHIP」本誌は、お楽しみいただけましたか? 本誌は、今後のさらなる質の高い広報誌作成をめざし、読者の皆さんからのご意見・ご感想をお待ちしております!

ご意見・ご感想は、下記のEメールアドレスへお送りください。

Eメールアドレス
mmu-ship@fc.miyazaki-mu.ac.jp

連続リーエッセイ いいだしっぺ



◆執筆 阪本 博志准教授 (大衆文化・出版文化論ゼミ)
※写真は、幼少期のもの

1974年生まれ。2003年研究指導認定退学。京都大学博士(文学)。日本学術振興会特別研究員・武庫川女子大学博士研究員を経て、2006年にMMU専任講師に就任。

夢をみるという行為 高校生の皆さんにとって、大学の教員は、どのような存在に見えるだろうか。いまはあまりピンとこないひともあるかもしれないが、大学の教員は、教育者であるとともに研究者である。つまり、じぶんの専門の研究テーマを掘り下げてその成果を発表するとともに、そこで知りえたことを学生の皆さんに伝えていく職業だ。

私の場合は、戦後とくに一九五〇年代〜一九六〇年代の日本の文化を、当時の雑誌を調べたりインタビューをして、研究している。大学を卒業し大学院に進学して研究を続け、二〇〇六年に宮崎公立大学に赴任した。二〇〇八年には一九五〇年代を代表する「平凡」という雑誌について、自身のそれまでの研究をまとめた本を出版した。

私は一九七四年生まれなので、じぶんが研究している時代には、もちろん生まれていない。それゆえ、「どうしてそういう研究を思いついたのか」と聞かれることが大学院生のころからあった。それに加え、大学の教員になってからは「どうして大学の教員になろうと思ったのか」と学生に尋ねられることができた。

子どものころから私がおりおりに関心を持った職業はいくつかある。少年時代には、考古学者にあこがれたことがある。フタバスキリュウの化石を発見した鈴木直氏や岩宿遺跡を発見した相沢忠洋氏のことを本で読み、このおふたりにまぶしさを感じた。中学や高校では戦後日本の小説を多少読んでいたこともあり、小説家になりたいと思った。とくに好きだった松本清張は、現在大

学の授業でとりあげるにいたっている。いま就いている職業とこのふたつの職業とを対比してみると、古い雑誌の「ページ」をひらいたり当事者のお話に耳を傾け当時の文化に光をあてていくことは、うずもれていたものを掘り起こしていく考古学の作業とどこか似ているように思える。また、その「戦後」という時代に関心を抱いている問題意識の底の一部には、おそらく、当時書かれた小説を中高生のころに読んでいたという体験がある。さらに、研究者であるから論文を発表したりときには出版社や新聞社などから依頼を受けた原稿を書く。これは、ものを書くという点では、作家が小説や随筆・評論を執筆する作業と重なりがあるようにも感じられる。

考古学者と小説家はいつけん、へだたりのあるしごとに見える。けれども私の場合、別々の夢のあいだにお互いがついていた結果、戦後日本文化の研究にたずさわって得た知見を文章や授業で伝えていくといういまのしごとになっているのだと思う。そういう意味では、子どものころから見つけた夢の着地点で、次の夢に向かっているのだろう。だから、高校生の皆さんには、夢を見つづけたら、「ああいっぺ」という目標や希望を持ちつづけてほしいと強く願う。

ところで、宮崎公立大学のほかの先生方は、高校生のころどういった夢を持っていたのだろうか。あるいは、どうしていまのしごとに就こうと思ったのだろうか。次回は、森津准教授に聞いてみたい。

社会で活躍するMMU卒業生に、当時の学生生活や社会人としての近況、今後の展望をインタビュー。今回は、同じ職場に勤めるMMU出身の後輩から先輩に質問をしてもらいました

どこで働くか、ではないんだ。

デル株式会社 杉尾 直一さん

平成 14 年度卒業生
宗教学ゼミ

杉尾 (以下、杉) デル株式会社宮崎カスタマーセンター (以下、MCC) には、大きく分けて2つの部署があります。1つはセールスです、もうひとつがテクニカルサポートです。私たちはこのテクニカルサポートで働いています。主に困っているお客様の手助けをする仕事になります。

堀田 (以下、堀) 私たちは1カ月の研修を終えてお客様の対応の仕事をしていますが、杉尾さんは、私たち新人社員の教育やケアをする仕事ですね。

杉 MCCの仕事は2つのパターンがあって、直接お客様とやり取りをしてサービスを提供する仕事と、その仕事をサポートする仕事に分かれるけど、私の仕事が後者というわけだね。

高橋 (以下、高) 私は入社時から働く人をサポートしていく仕事をしていきたいと思っていましたが、杉尾さんはどうして新人の教育をしようと思ったんですか？

杉 僕も最初1年くらいは必死でお客様の対応をしていたんだけど、自分が学んだことを新人社員に教えることで良い仕事ができるなら、自分与える影響を大きくしたいと思ってね。会社はチームなわけだから、1人でも多くのお客様を幸せに出来るならやってみようと思ったんだ。せっかくキャリアアップできる会社に勤めているんだから。

堀 最初の頃、会社の文書がたまに英語で届くの戸惑いました (笑)。これも外資系ならではのと思うのですが、杉尾さんも国際的な交流は多いのですか？

杉 もう慣れた (笑)？ でも、勝手な見解だけどMMU出身の人って英語に対する苦手意識とかが少ないんじゃない？ これってすごい強みだと思うよ。ふたりにはまだないと思うけど、日常的に英語が必要なんだよね。大きい企業だからアジア全体でアクション起こす時にはもちろん英語でやりとりするしかないから。同僚も海外の人だったりするし。ふたりもすぐにそうなると思う



平成 23 年度卒業生
高橋 祥子さん 広告コミュニケーションゼミ
堀田 啓太さん メディアとジェンダー論ゼミ

よ。ただ、外資系に関わらずどこで働いても必ず英語とICTの能力ってツールとして必要だと思うんだよね。MMUだったらどっちも学ぶじゃない。僕が学生の頃はタイピングが必修で必死に頑張ってたなあ (笑)。あの頃は苦だったけどやってよかったなと思う。英語とICTに対して免疫を付けてくれたMMUには感謝してるよ。

堀 学生時代に勉強してた事が直接生きるという場面は少ないけれど、色々なことへの考え方の根本ってすごく大切だと思いますね。

高 確かに。わかりやすく説明することが私たちの仕事では求められていて、卒論制作の時、よく「子供が読んでもわかるように書きなさい」と指導されていたので、それはすごく仕事に生きていくなと感じます。

杉 学生時代の学びはすごく役に立つよ。もちろん専門ゼミだった宗教学の知識が直接、というわけではないけれど学生生活での様々なことへの取り組み方や、大きな壁である卒論制作では、目標を達成するための準備やプロセスって仕事の中で

も絶えず必要なんだよね。目標があって、今何をすべきか、とかね。僕のゼミは卒論を100枚書かなきゃならなかった。絶対1日じゃ終わらないけれど、コツコツやれば必ず終わるんだって実感したし、目標に向かってやればできるんだって自信もついたね。だから仕事でちよっと辛くてもあの卒論に比べたら何でもないなって思えるよ (笑)。

堀 「卒論を書いた！」っていうのが自分の糧になってるんですね。私たちは研修を終えたばかりですが、杉尾さんは今後について何か考えていらっしゃいますか？

杉 もちろん考えてるよ。今の仕事で留まろうとは思ってないからね。大事なところでするかじゃなくて何をやるかだから。とは言え、外資系ならではの結果主義で、やれば評価してくれるし、色んな機会も広がっているところにせっかくなかめられているわけだから、ここでやれると思うことは全部やっていきたいよね。

■記事 志垣賢次
(4年 広告コミュニケーションゼミ)

デル株式会社

米国デル社 (NASDAQ: DELL) の日本人として1989年設立。お客様の声に耳を傾け、お客様のビジネス拡大に貢献する革新的なテクノロジーとサービスを提供するソリューションプロバイダー。本社所在地は神奈川県川崎市、ほか東京、大阪、宮崎に事業所があり、社員数は1,800人。(2012年2月現在)

